

i n

て未来へ

与真提供:水土里ネット常西用水 令和5年10月30日(月)

「疏水フォーラム」が、富山市の富山国際会議場を舞台に開催されました。将来に引き継いでいけるよう情報の共有・発信などを行うことを目的とした農業者のみならず、国民共有の貴重な財産である「疏水」。その機能を広く周知

都市部の疏水の現状とは

混在化が進む









「常西用水の維持管理活動につい

務局長・水谷英二氏から活動報告 さらに水土里ネット常西用水事 農業用水の維持管理について」、 講演「都市化が進む地域における 天狗岩事務局長・磯田靖氏による

て」が行われ、都市部の疏水にお

ける現状が語られた。

(上)(左下)「疏水の今そして未来へ」と題し、5年ぶりに開催された「疏水フォーラム」。多くの疏水関係者が

参加した。(右下)ロビーには疏水に関連するパネル展示がなされ、多くの人が足を止めていた。

拓哉氏による基調講演「疏水をめ

国から740名の疏水関係者が 回目の開催となった今回は、全 村振興局整備部水資源課長·瀧川 なげていきましょう」と語った。 ばよいかを考え、具体的な活動につ 自らの地域でどのように取り組め 疏水ネットワーク会長(水土里ネッ 事の開会宣言に続き、挨拶を行った 参加した。 れている「疏水フォーラム」。13 を機に、平成18年度から開催さ 「保全管理における課題を共有-ト常西用水理事長) 中川忠昭氏は フォーラムでは、農林水産省農 水土里ネット富山の鹿熊正一理 「疏水百選」が選定されたこと

各地域で共有

続くパネルディスカッショ

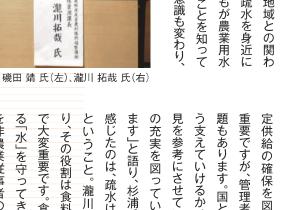
疏水管理の現状と課題を

なぐ啓蒙活動を継続していきた る機会がある。今後も次世代につ こそ、より多くの人が疏水に接す 会を行っています。都市部だから どもたちを対象に植樹体験学習 について、熱く語った。 い」と髙橋氏。水の教育の大切さ います。また、水源涵養林では子

りも増える。もっと疏水を身近に 天狗岩用水。磯田氏は「社会科見学 ほしい。そうすれば意識も変わり、 の恩恵を受けていることを知って 感じてもらって、誰もが農業用水 の理解が深まれば、地域との関わ 重要だと思います。子どもたちへ ないものだと知ってもらうことが 業用水が自分たちの生活に欠かせ や食育を通して、子どもたちに農 400年を超える歴史を有する

疏水は先人の涙ぐましい努力に 対する理解促進を図っています。 いったイベントも企画し、疏水に ふるさと探訪・親子バスツア す。このような施設を活かして、

よって存在し、私たちの生活が成





橋隆氏が登壇。「都市地域の疏水

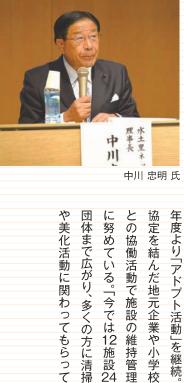
述の中川氏、瀧川氏、磯田氏に加 浦未希子教授、パネリストには先 学グローバル教育センターの杉 では、コーディネーターに上智大

え、水土里ネット鹿妻理事長の髙

杉浦 未希子 氏

不法投棄なども減るのではないで しょうか」と語った。

り、その役割は食料生産という点 ということ。瀧川様が仰るとお 感じたのは、疏水は国の礎である 見を参考にさせていただき、施策 う支えていけるか、皆さんのご意 題もあります。国として管理をど 知っていただきたい」と総括し、 を非農業従事者の方々にもぜひ る「水」を守ってきた歴史と努力 ます」と語り、杉浦氏は「今回強く の充実を図っていきたいと思い 重要ですが、管理者不足という問 定供給の確保を図る上で極めて は「疏水の保全管理は、食料の安 で大変重要です。食料生産を支え 各地域のお話を受けて瀧川氏



との協働活動で施設の維持管理 協定を結んだ地元企業や小学校

事業で造られたプロムナードで

あると考えます」と力を込めた。 とについて一層取り組む必要が

水土里ネット鹿妻では、平成16

きる常西用水。中川氏は「県単独 を残し、桜並木や松並木を散策で

すが、地域住民が疏水の歴史を知

「疏水」は国の礎であることを

最上流に昔ながらの石積水路

その歴史を知ってもらう。このこ を担う子どもたちや地域住民に て感謝することが大切です。将来 り立っています。このことに対し 地域住民にも知って欲しい

具体的な取組が紹介された。 策を講じているのか、各地域から がった。第2部・第3部では、こう う声が各地域共通の課題として挙 りを持つことが大切である」とい ている。そうした地域住民と関わ

> る学習の場として活用していま 電所も、子どもたちが環境を考え る上でとても有効です。小水力発

した課題についてどのような対

共有。中でも「都市化が進み、疏水 そして都市地域に共通する課題を 題」では、各々の地域特有の課題、

髙橋 隆 氏

に関心のない非農業従事者が増え

討論が交わされた。

第1部の「疏水管理の現状と課

の保全活動を考える」をテーマに

15